吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.02

外房大原沖のSLJ

★いつ、どこで、どんなときでも釣りを楽しんでしまうのがヨッシー流。持ち前のポジティブさで臨んだ外房・大原のSLJは、甘くはなかった。いやいや、状況がタフなら、戦略を考える楽しさがあるじゃないか――。竿を握る手に、ギュッと力が入った。

文◉高橋 剛／撮影◉本誌編集部

もっと波動が弱いほうがよかったんだな……

SLJ――スーパーライトジギング――という言葉を聞いただけでワクワクする人は、間違いなくSLJの経験者だろう。

体に負担が少ない超軽いジグ&タックルで、イージーなアクションをするだけで、色いろな魚が釣れてしまうSLJは、海のルアーフィッシングの中でも出色の面白さだ。

ターゲットを特別絞ることなく、その時期、その日、その場所にいる魚を釣るというフリーダムさは、SLJにのびやかなムードをもたらしている。

一方で、SLJと聞いて首を傾げた人は、SLJをやったことがない人だろう。

一度でもやれば楽しい釣りだということが分かる半面、「エスエル・ジェー」というちょっとイマドキっぽいアルファベットの並びもあって、年齢が高い保守的な釣り人ほど敬遠しがちである。

▲ヨッシーの釣り座は左舷ミヨシ。片舷に並んでドテラ流しで広く探っていく

もったいない。実に、もったいないことだ。

ここで鼻息をフゴフゴ荒げて登場するのが、ライターのタカハシゴーである。

「昭和44年製のオレが思うに、SLJこそ高齢者に最高に向いている船のルアー釣りだ」

熱弁している。

昭和44年製ということは、現在53歳。今回、外房大原港の広布号に乗り込むメンバーの中で最年長である。

はっきり言って不器用だし、知力・体力ともに衰える一方であり、「1尾でも釣れれば十分でございます」というタイプで、釣りへの欲は薄い。

そんなタカハシゴーでさえ、

スポーティーで爽やかなスーパーライトジギング

やらなきゃ損である。

4月18日6時ごろ、広布号はボチボチと港を離れた。港内は穏やかな朝だったが、沖では少し強い風が吹き、ウネリもある。

広布号に乗り込んだのは、我われエンジョイ・エブリー・フィッシング軍団の4名だ。期せずして貸し切り状態になったが、SLJは竿数が多いほうがいい。

「何しろ、エサではなく金属製のジグで魚を釣ろうっていうんだからね」と、ヨッシー。

「魚の捕食スイッチを入れてジグに食いつかせなければ、話が始まらないんだ。

そして捕食スイッチをオンにする最強のきっかけは、ほかの魚が捕食すること。ルアー釣りは、だれかのヒットを皮切りにして、バタバタッとアタリが続くことが多いんだよ。

「SLJは最高である」とのたまうのだ。

5時半、大原港にはジャッカル・プロスタッフの吉岡進さんの姿があった。

「ヨッシー」などという愛称で呼ばれる茶髪のパーマ男だが、昭和56年製の41歳。結構いいおじさんなのである。

そしてヨッシーの釣友が二人。イチロウこと鹿島一郎さんは昭和54年製の44歳。トモキこと板倉友基さんはグッと若くて平成6年製の28歳だ。

平均41・5歳。ズバ抜けて若いトモキを除けば、平均46歳。もはやリッパなおじさん軍団が「やっぱSLJは面白ぇ～」と口をそろえるのだ。

底上5メートルまでゆっくり誘うと根魚がよく釣れる

ブレードのフラッシングでアピール

▲スピニングタックルでルアーをアンダーハンドキャスト、着底したらタダ巻きするだけ
◀スローなワンピッチジャークで底付近をていねいに探りウッカリカサゴを釣り上げた

だから、なるべく多くのルアーが海中にあって、魚にコンタクトしたほうがチャンスも増えるんだけどね……」

決して好条件とは言えない中、7時に大原沖40メートル前後のポイントに到着し、SLJがスタートした。

と、ものの5分もたたないうちに、イチロウがドヤ顔を見せた。SLJ用のタックルはライトなので、竿の曲がりも大きく、ダイナミックだ。

「やったじゃん！」

「カッコいいよ！」

「バラすなよ、バラすなよ！」

明るい声が飛ぶ。

だれかにヒットすると、みんなにチャンスが訪れる。だからだれもがヒットした人を心から応援できる。

そこには敬意や憧れこそあれ、ジェラシーややっかみなどといったネガティブな感情はない。

このスポーティーな爽やかさも、SLJを始めとするルアー釣りの楽しさの一つだ。

タカハシゴーも、トモキも、そしてヨッシーも、固唾（かたず）を飲んでヤリトリを見守る。魚が走り出したので、全員竿を上げた。

貴重で大事なファーストヒット。ここはなんとしても獲ってもらわなければ……。

慎重なヤリトリの末に姿を見せたのは、スロー系ジグ（スロージギング対応の幅広ジグ）をくわえた丸まるとした45センチ級のショゴ（カンパチの若魚）だった。

「80グラムのスロー系ジグで10メートルほどワンピッチジャーク。そこから2メートルほどフォールさせたところで糸が止まったんです。そりゃ合わせますよね！」と、満面の笑みを浮かべるイチロウ。

すぐにトモキにヒット。青物が続くかと思われたが、ナイスサイズのESO、すなわちエソだった。SLJでは定番のゲストである。

ジギングやタイラバなど釣り方は自由に楽しめる

楽しさやメリットが多いSLJだが、その中でも大きいのは、フリーダムさだ。

船長への確認や周囲への配慮、状況の判断は必要だが、基本的には何をやってもOK。とくに広布号の野島幸一船長のようにSLJをメインの釣り物とする船長ほど、「釣り方は自由」というオープンな考え方の持ち主だ。釣り人は、自分で戦略を立ててのびのびと釣りが楽しめる。

ヨッシーが選んだルアーは、60グラムのジャッカル・バンブルズ バイトビーンズTGだ。

「バイトビーンズはブレードが付いてて、タダ巻きで強くアピールしてくれるルアー。潮が効いてないみたいだから、使ってみようかな」と、言っているそばからカサゴを釣ってみせた。

「巻いて、落としての繰り返し。それだけで釣れたよ」

釣果を出したことで、笑顔を見せるヨッシーである。

釣り開始から45分もたつと、なんとなくだがその日の傾向が見えてくる。今日はSLJにしてはかなりアタリが少なく、シ

▲しなかやかなSLJロッドが弧を描く

着ドンでした！

★スロー系ジグで2キロ級のマハタを釣り上げて大満足の鹿島さん

▲開始早々に1.5キロ級のショゴを上げた

▲魚の活性が低いと判断し、波動の弱いタイラバで1キロ級を上げた板倉さん

▶広布号タングステンジグでウッカリカサゴをを釣り上げたタカハシゴー

ブい。「少ないチャンスを逃せない」という緊張感がある。

その30分後、またもイチロウがビッグファイトを始めた。

「着ドンで食ってきた！」

野島船長も操舵室から身を乗り出し、「なんだろねえ？　トルクがある引きだから、マハタっぽいな」とうれしそう。

イチロウはもともとエサ釣りの人だった。どんな釣りでもとりあえずアオイソメを持参することから、一時は「イソメマン」とも呼ばれていたが、今やすっかりルアーの人である。

「もともとは、エサとルアーで釣果に差が出るのか知りたかったんです。だからアオイソメを使ってみた」とイチロウ。トータルで見れば、エサもルアーも差はない、という結論に至ったそうだ。

今は、「ルアーによって釣果に差が出るのかが知りたい」と、ルアーに傾倒している。

そして、ショゴに続いてのナイスファイトだ。ルアーは同じくスロー系。イチロウは過去何度かの広布号乗船経験から、「このポイントはスロー系シングがよさそう」と読んでいた。

イチロウは落ち着いて魚をいなしているが、何しろタックルがライトでPEは1.2号、リーダー4号と細糸。見ているだけでもドキドキする。

ユラリ……。

茶色い魚体が見えてきた。ネットインしたのは、2キロ級のナイスなマハタだった。スロー系シングにこだわるという戦略が見事にハマったイチロウ。イソメマン改めルアーマンの面目躍如である。

魚の活性とルアーの波動をバランスよく合わせる

主役のヨッシーは、もう一つパリッとしない。バンブルズジグSLJ TGの80グラムでウッカリカサゴを追加したものの、なかなかアタリが出せない。

今日はとくにシブい。野島船長も苦笑いだ。

「魚探の反応を見てるとベイトもいるし、ターゲットもいるにはいるんだよね。

ベイトはちょっと小さめだけど、こんなにアタリがない理由にはならない。

水温が極端に下がったわけでもないし、潮もそれなりに流れてるし、なんでだろうねえ」と野島船長。

こうなると、「やっぱり金属片じゃ魚を振り向かせられないんじゃないの……？」と、ルアーに対して疑念を抱きたくなる。

だが野島船長によると、今日はエサ釣りの船も不発とのこと。まぁ、自然相手の遊びならこういう日もある、ということだ。

時間は無情にも過ぎていく。沖揚がりの11時まで、あと30分。トモでタイラバに勤しんでいたトモキが、「キタ！」と叫んだ。1キロ級のマダイだ。

SLJの取材にもかかわらずタイラバでヒットさせてしまうあたり、28歳とまだまだ若く、釣果にも貪欲なトモキらしい。

「今日は波動が弱いほうがいいかな、と思って、タイラバにしたんです。会心の一撃ですよ」

ニコーッと笑う。

その爽やかな笑顔を見て、タックルボックスからジャッカル・鉛式ビンビンスイッチ80グラムを取り出したのは53歳のタカハシゴーである。

彼はこの日、朝に受付で購入した広布号タングステン100グラムで粘り通し、まずまずサイズのウッカリカサゴを1尾キャッチしていた。

しかしトモキの「ニコーッ」にやられ、ビンビンスイッチにスイッチ。するとすぐにゴンゴンゴンッとマダイらしきアタリがあったのだが、残念ながらハリ掛かりしなかった。

だが、確実にマダイだった。その様子を見ていたヨッシーは、「そうか～、そうだったのか～」と、天を仰いだ。

「朝のうちは潮が効いてなかったから、波動が強いバイトビーンズTGを使ったんだ。

時間がたつにつれてだんだん潮が効いてきたから、波動を抑える狙いでバンブルズジグTG SLJにしたんだけど、トモキのタイラバやゴーさんのスイッチにアタリが出たということは、もっと波動が弱いほうがよかったんだな……」

ヨッシーいわく、波動が弱い順に、スイッチ、タイラバ、細身ジグ、幅広ジグ。最後はタイラバとスイッチにアタリが出たことで、「もっと波動が弱いほうが……」と結論に達したのだ。

だが、みなさんお気付きだろうか？　ショゴにマハタを釣りヒーローとなったイチロウは、かなり波動が強いスロー系の幅広ジグを使っていたのである。

「結局、正解は分かんないッスよ。そこが釣りの魅力なわけで」と謙虚なイチロウである。しかし、その舌は滑らかだった。

「すごくシブかったのは確か。だから基本的には、ヨッシーの言うとおり波動が弱いほうがよかったんでしょうね。

僕が釣ったカンパチはフォールでジグがヒラを打ったときだし、マハタはジグが着底した瞬間の着ドンだったので、フォール中に長くヒラを打って広い範囲にアピールできたから、あまり食い気のないマハタも飛びついたんだと思います。

ただ、次も同じことがうまくいくか分からない。結局、限られた時間の中でどれだけその日の状況に合わせ込めるか、ではないでしょうか」

しっかりと結果を出しているだけに、44歳イチロウの言葉には説得力があった。

「やれるだけのことはやった。次、頑張るよ」

少し肩を落としながらも再チャレンジを誓う41歳のヨッシーだった。

なんだかんだ、釣りをエンジョイしている連中は、みんな心が若いのである。

魚の活性に合わせたルアー選び

★ルアー選びの一助として魚の活性に最適な波動を出すルアーを選ぶと効果的。基本的に魚の活性が高いときは波動は強く、低いときは弱いルアーをチョイスすればOK。ここにSLJ乗合で使う5種類のルアー＆タイラバをピックアップ。波動の強い順から並べてみたので参考にしてほしい。

ヨッシーのメモリアルショット

◉初夏の紫外線は油断大敵。ヨッシーの愛用する日焼け止めクリームは資生堂のアネッサ シリーズで肌に優しい「パーフェクトUV マイルドミルク N」。曇っていても紫外線対策は忘れずに快適に釣りを楽しもう。